

現代世界と歴史のはざまを考える

清水明子

文学部西洋史学専攻 教授

近現代ヨーロッパを主に歴史学の視座から探究する本研究会には、4年生14名と大学院生3名が参加しています。2名が留学中（ブルウェー、ロシア）です。

本研究会の現在のテーマは、ヨーロッパ近現代の諸問題、特に帝国主義と社会ダーウィニズム、ナチズムとスターリニズム、ファシズムの思想と支配

種主義が生起した歴史的メカニズムの解明は本研究会の重要な研究課題の一つです。

の実証的な研究です。同時に、民族自決による国民国家の建設と国民的アイデンティティの構築、国民史の歴史叙述やヨーロッパ近代のもつ構造的暴力のあり方について調べています。学生が扱う対象も、英仏独からオーストリア、ポーランド、リトアニア、ロシア、アメリカと広範な地域にまたがります。私自身は、ドイツ現代史とユーゴ史を専門とし、バルカンの多民族社会において人と人の関係が劇的に変化する重要な画期となった、ヒトラーのドイツによるユーゴ解体、セルビア占領、ボスニアを含む「クロアチア独立国」の創設、それが90年代のユーゴ民族紛争へ及ぼした影響について、セルビア語やクロアチア語、ドイツ語で書かれた史料を発掘して分析しています。数

量虐殺の運命に遭わせた民族主義や人種主義が生起した歴史的メカニズムの解明は本研究会の重要な研究課題の一つです。歴史学は、我々の今生きる世界の政治経済的／倫理的構造の理解につながる営みです。過去から何を継承し、今後どのように生かしていくか、歴史学は将来を見据えて「歴史」を紡ぎ出しています。その際、歴史学の理論と方法を学び、史実に近づくために史料を吟味して実証を行う作業が欠かせません。しかし、史実に指示対象を持たない単なる「物語」が描かれることは多く、「国民」や「民族」を再定義して序列をつけるための「記憶の戦争」はグローバル化のなかで激しくなっています。学生諸君は、日本にいながらもゼミや合宿において緊迫感を持ちつつ、現在のヨーロッパにおける歴史研究や歴史叙述に頻繁に見られる問題点、史実の隠蔽や善悪への単純化、イデオロギーの歪曲などがどのような形でなされているかを見定めるトレーニングを和気藹々としています。

過去を見つめ、歴史を描く

佐藤まゆ子君 文学部西洋史学専攻4年

清水研究会では、西洋近現代史という広い領域の中で、ゼミ生各々が自分の関心に沿ったテーマを設定し、研究に取り組んでいます。研究会では、歴史を知り、学ぶだけでなく、歴史をどのように描くのか、という「書く」力が求められます。先生の専門はドイツ現代史、ユーゴスラヴィア史ですが、学生の取り扱う地域は独、仏、英、東欧、ロシアと幅広く、ゼミ全体で問題意識を共有し、自らの研究に役立てています。先生の指導の下、多彩なテーマを掲げる仲間と共に、過去と現在を結びながら過去を見る目を養い、先人が描いた歴史をたどるだけでなく自分の手で歴史を描くことを目標に、日々史料と向き合っています。



南米アンデスとアイヌの人々の間で

ラテンアメリカ地域とスペイン語の社会言語学、そしてアイヌ語の口承文学を研究する、それぞれ15名弱の2つの研究会です。

私はラテンアメリカ地域研究とアンデス人類学を出発点として研究を始め、特に南米のペルーとボリビアでは、大学生・大学院生としての研究や、在ボリビア日本大使館での専門調査員の仕事で、長い年月を過ごしてきました。特にいくつかの家族と生活を共にする中で、先住民の存在感が年々増すアンデス社会で、先住民の言葉の世界やアンデス社会をどのように見るかを、家族の視点から教わってきました。

その後、日本社会で研究者として生きていくにあたり、アイヌ語とアイヌ語の口承文学の勉強を始め、フィールドワークを通じて口承文学や先住民言語とどのように関わることができるかに、少しずつ目を開かれていきました。湘南藤沢キャンパスでは、教員が2種類の異なる研究会を担当することが可能になっているため、この2つの研究分野をそれぞれ研究会として立てています。私が驚くほどに熱心な学生たちも多く生まれ、充実した議論と考察の場となっています。

ふじた まさる
藤田 護

環境情報学部 専任講師



「南」からの思考(スペイン語圏の言語と社会の研究)

にわしゅうせい
丹羽 秀成君 総合政策学部4年

研究会ではスペイン語圏の言語と社会を中心として、輪読を通じて議論を行い、学生の理解や関心を深めています。多種多様なバックグラウンドを持つ学生がいることからそれぞれが関心を持つ内容は多岐にわたり、研究会で扱うテーマはバラエティに富んでいます。

その上で大切にしている軸が「南」からの思考です。ラテンアメリカは複雑な歴史と構成を持つ社会であり、現代世界に対して異議を唱え、新しいビジョンを提示してきた背景があります。

また半学半教の精神の下、教員と学生という立場において分け隔てることなく、お互いが学び合い、教え合う存在として自由闊達な意見交換を実践しています。

アイヌ語・アイヌ語口承文学を学ぶ

ほんだよしや
本田 義矢君 総合政策学部4年

アイヌ語・アイヌ語口承文芸研究会は、北方のアイヌ民族に関する言語・文化・社会を中心に、広く文化人類学やオーラルヒストリーに関する理解を日々深めています。

研究会内では、論文や研究書を読み進め、その内容に対して議論を交わす「輪読」、教材や物語を通じての「アイヌ語の講座」などを主に進めています。

学生の意見に親身に寄り添い、整理して論点を導いてくださる藤田先生の下、文化、言語、自然、神話など多岐にわたる分野に関心を持つ個性的な学生が集まっています。学生の多様な視点からの論点生まれ、全員でそれを受け止め、(ときどき時間を超えつつも)ゆっくりと論じていける研究会です。